

「」挨拶

厳寒の候、皆様におかれましては益々「」清栄のこととお喜び申しあげます。所長の横山です。日頃は弊社取扱い各紙を「」愛読いただき誠にありがとうございました。旧年中は大変お世話になりました。本年もスタッフ一同、迅速丁寧な配達を心がけて参ります。改めまして本年も引き続きの「」愛顧お願い申し上げます。

今年最初の駒澤書翰です。久しぶりに簡単に自己紹介をします。出身は東京都、昭和50年生まれのB型みずがめ座です。新聞販売には四半世紀以上携わっております。駒沢店勤務は3年目になりますが、以前は石川県金沢市や東京都大田区に勤務していました。私たちの仕事は地域密着型なので、勤務地それぞれに愛着があります。長男が保育園の年中から小学校卒業までの8年間を過ごした金沢勤務時代は、子ども達との思い出がたくさん作られました。海にも

山にも近く自然豊かな環境は、夏はキャンプ、冬はスキーと、子ども達にとっても貴重な経験を積むことができました。やがて一昨年の能登半島地震では、大好きだった能登の自然を思い出しても心が痛みました。今は全国の観光地でオーバーツーリズムが問題視されていますが、北陸新幹線が開通する前のローカルな金沢で生活できた点も良かったです。大学生の長男、高校生の長女、中学生の次女、そして妻の5人と犬1匹で暮らしています。駒沢勤務時代にコロナ禍に巻き込まれ、子ども達の通う学校が休校になりました。その時、次女のたっての頼みで犬を飼うことに。毎朝の散歩を次女がすることを条件に、家族として迎え入れたのはミニチュアシュナウザーの男の子です。小学3年生だった次女も4月から高校生です。中学に上がってからは、上京してから始めたバスケットボール部の朝練もあり、朝晩の散歩はもっぱら私が妻の仕事になりました。子ども達が成長するにつれ、共有する時間が減るなか、犬との時間はそれを埋める私たち夫婦にとって大切な癒しになっています。

弊社、駒澤販売所では5人の専業スタッフと4人の新聞運送学生の合計の名のスタッフが働いてくれています。都会の新聞販売店としては比較的小規模なお店です。順次この駒澤書翰にて紹介していきますので、お読みいただき叱咤激励していただければ幸いです。

毎月第3日曜日」折込する「」の「駒澤書翰」。この記事良かつた、この料理美味しかった、この場所素敵だった、などすべて私の主観で皆様に伝えたい事を発信しています。やがて、過去には批判を受けたこともありましたが、一介の新聞販売店店主のつぶやきと、寛大な気持ちでお読みいただければ幸いです。とは言え、毎号一生懸命作っていますのでアドバイス、「」意見等ありましたら是非お聞かせください。なお、駒澤書翰のバックナンバーはNSN駒澤のホームページにて閲覧可能です。



第34号

発行日：
2026年1月18日
発行所：
株式会社エヌワイケー
〒154-0012
世田谷区駒沢5-7-6
電話：
03-3704-8391
FAX：
03-3703-7121
発行人：
横山和俊

駒澤書翰

馬句

所長のひとこと

引き続き横山です。年齢のせいか、年々世の中の動きが加速度的に早くなっています。ひとつは「」といえ、確実に動きは早くなっています。ひとつは「」技術の進歩でしょう。さらに生成AIの登場により私たちの生活は大きく変わり始めました。生成AIで作り出されるフェイクニュースは、その真偽を確かめることはもはや簡単ではありません。さ

らにたちの悪いことに、フェイクニュースは真実よりも早いスピードで拡散します。そういう時代だからこそ、確かな情報は大切な羅針盤です。アルゴリズムの影響で偏りがちなネット情報に対して、新聞は一覧性にすぐれた情報媒体です。1面から最終面まで見出しを見ながら紙面をめくれば、広く世界の出来事を知ることができます。

「Jの「所長のひとり言」のコーナーでは、取り扱い紙である日経新聞、毎日新聞の中から私が注目し、皆様と共に共有したい記事を紹介します。では早速今月も記事を紹介します。

広く世の中を知る目的で新聞を読むことはとても重要だと思います。しかし、1日300件以上の記事が掲載される新聞において、限りのある時間の中ですべてを読むことはできません。そんな時はテーマを何個か決めて読む記事をチョイスしてください。テーマを入り口に世の中を覗いてください。そんな私の今のテーマは「外国人問題」です。昨年7月の参院選で、物価高対策とともに争点の一つになった外国人問題。「日本人ファースト」を掲げる参政党的躍進に引きずられる形で、各党が外国人受入れに慎重な姿勢を示しています。外国人排斥の声は勇ましくひびき、漠然と不安を抱く人々の支持を集め、公約に掲げやすいです。本当に排斥一辺の論調で良いのでしょうか。確かに、欧米各国は移民受け入れに伴う社会問題が発生しているもの事実です。しかし、私たちの業界でも人手不足は深刻で、多くの新聞販売店で外国人労働者を雇用しています。まずは事実を正確に把握することが大切です。参院選以降、外国人問題に関する記事は必ず読むようにしています。今月は外国人問題に関する記事を紹介します。

12月17日付日経新聞コラム大機小機から「外国人問題2つの視点」を紹介します。以下記事の紹介です。

外国人問題には2つの視点がある。第一の視点は、外国人による違法行為やルールからの逸脱に対する国民の不安や不公平感である。不法滞在や不法就労の問題、在留資格や国籍取得のあり方、国民健康保険料や医療費の不払い、制度の乱用、児童手当、就学補助、留学生支援のあり方、観光客のマナー違反などオーバーツーリズム問題、民泊事業、外国人犯罪の増加、土地取得やマンションの短期売買、免税制度の悪用など外国人をめぐる様々な課題、問題が指摘されている。これに対して政府は排外主義とは一線を画しつつ、既存のルールの順守や各制度の適正化を図っていくとしている。当然のことであり、国民もこれに反対しない。ただし、誤解や誤った指摘、実態が不明なまま針小棒大に伝えられている事案も少なからずあり、まずはデータの統計で実態を

正確に把握し、そのうえで対処すべきである。せりに、眼前の事態に対処するだけでなく、外国人の日本語学習環境の整備や、日本の制度、法律、ルールへの理解を深めるための社会統合政策も進めていくべきである。

第一の視点は、外国人の増加ペースの問題である。25年6月末時点では在留外国人人数は過去最高の36万人に達した。総人口に占める比率は3・2%と欧米先進国に比べまだ低いものも、現在のペースでの増加が続けば、2040年代には欧米並みの10%に達するとの試算もある。外国人増加の背景にあるのが人手不足だ。国内人材や生産性向上で賄つてなお不足する部分を外国人労働者で補っている。今後、日本の労働力人口の減少が加速する下で、外国人労働力への依存度がさらに高まっていくと見込まれる。しかし、日本社会には早いペースで外国人を受け入れる素地はできおらず、外国人労働者の増加を抑制すべきだとする政党もある。安易な外国人労働力依存は良くないが、必要な労働力を確保できなければ、日本経済の成長を制約する「J」にな。それを回避するには一層の生産性向上が必要である。つまり、政府がどれだけ日本企業の生産性向上を引き出せるかが問われている。

日経新聞コラム「大機小機」は経営者、学者、記者などが身分を明かさず個性的なペンネームで時事問題を論ずる名物コラムです。このコラムを読むためだけに日経新聞を購読してくださるお客様もいるほどです。私も毎回必ず日を通しています。あるペンネームの人の口は、ほぼ毎回スクランブルをしています。今回は「追分」やとのコラムでした。ペンネームの通り、まさに今は分岐点だと思います。勇ましい声に引きずられ、正しい視点で議論できなければ、日本経済の成長を制約してしまいます。本当はもう一つ紹介したい記事もあつたのですが、スペースの問題で今回は紹介できません。次回紹介します。尻切れトンボお許しあさ。

